

あ な た と 市 政 を お す ぶ



かんおんじ

2020 / 令和2年

10 October



特集 追悼 大林宣彦監督

デンデケデケデケは鳴り止まない

青春映画の魔術師

『青春デンデケデケデケ』の映画化の話はいくつかあったが、いずれとも決めかねていたとき、大林宣彦監督で、という申し出があった。飛び上がりそうになった。ぼくは以前から大林映画のファンで、とくに『転校生』と『時をかける少女』が好きだった。まさに「青春映画の魔術師」と思っていたのだ。

実際にお会いした時、監督はあの優しい笑顔を浮かべて歩み寄ると、ぼくの手をしっかりと握り、「舞台を都会に移し台詞を標準語に、という企画もあるが、この作品の舞台はあくまでも観音寺、台詞は観音寺弁でいきます。これはぼくの弟たちの物語ですよ」と、言ってくれた。ぼくは大感激し、「お願いします」と即答したのだった。

これほど優しいまなざしで撮られた映画はほかにないと、しみじみ思う。

作家

芦原 すなおさん

1949年有明町生まれ。観音寺第一高校、早稲田大学文学部卒業。『青春デンデケデケデケ』で第27回文藝賞、第105回直木賞を受賞。観音寺市名誉市民。



1 2 3 1991年10月から12月にかけて市内で行われた映画撮影の様子 4 2017年7月に観一高で講演。前年8月に肺がんで余命3カ月と診断されながらも映画制作を続けたことや、観音寺市での映画撮影の思い出などを語った

特集

追悼 大林宣彦監督

デンデケデケデケは鳴り止まない

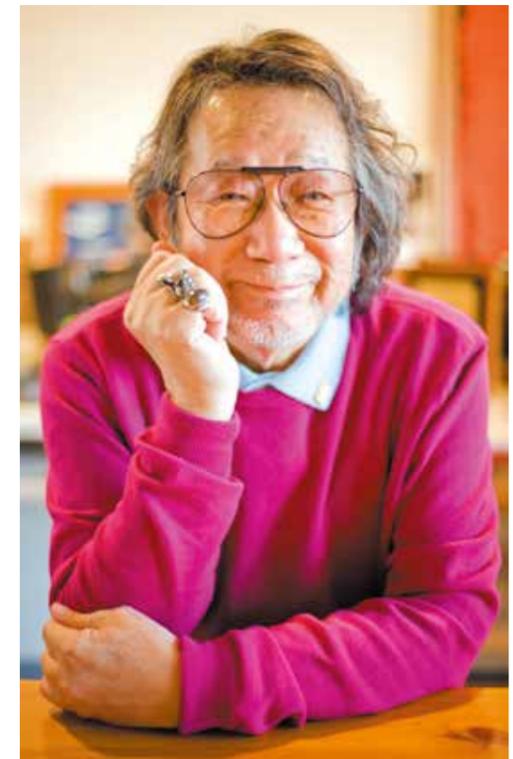
映画監督の大林宣彦さんが、ことし4月に亡くなりました。

大林さんは、観音寺市が舞台の映画『青春デンデケデケデケ』の監督としても知られています。1992年10月の映画公開から28年。この映画や原作小説の魅力をあらためてお伝えします。

映画作家

大林 宣彦さん

1938年広島県尾道市生まれ。故郷・尾道を舞台とした映画『転校生』『時をかける少女』『さびしんぼう』は“尾道三部作”といわれている。1992年10月に観音寺市を舞台にした映画『青春デンデケデケデケ』を公開。同作品は第16回日本アカデミー賞で優秀作品賞、優秀監督賞、優秀脚本賞、最優秀音楽賞など数々の賞を受賞したほか、平成4年度文化庁優秀映画作品賞を受賞した。2020年4月10日に永眠。



観音寺弁がいいんだ。とってもチャーミング。

大林宣彦さんが監督した映画は40本以上に及び、テレビドラマやCM制作など多岐に渡り活躍されてきました。大林監督は、1992年に芦原すなおさんの原作小説を基にした映画を制作しました。芦原さんのこだわりで、小説は観音寺の方言で描かれており、映画化にあたって、最初に企画された方から「あの観音寺弁じゃ通じないから、言葉を標準語にして、舞台を湘南辺りに変えないか」と提案されたそうです。

しかし、大林監督は「そんなことをやるから日本の映画は駄目になるんだ。これは観音寺でよらしい。観音寺弁がいいんだ」ときっぱり断りました。言葉だけ聞けば分からないかもしれないが、映画には物語があり、表現もしぐさもある。方言でも意味は分かる。それに観音寺弁はとってもチャーミングだ、と。

小説のストーリーではなく、作者の思いを映画化すること

にこだわり、「原作小説に書かれていることは一行たりとも外すまい。全部絵にしてみせよう」という覚悟でやっていた」と、大林監督は、後に芦原さんとの対談で語っています。また、故郷・尾道市と海を挟んで対岸にある観音寺市について、「古き良きものが残されている」「賢い暮らしに支えられているから風景が美しい」と話していました。

大林監督が遺した、私たちのまちを舞台にした、ふるさとの言葉による映画。28年経っても、監督が込めた思いと、作品の魅力は色あせません。

Message

プロデューサーである妻・大林恭子さんより

大林作品唯一の方言を使った映画。ロケ中、監督は原作を常に持ち、スタッフにも原作を持つようにと指示。観音寺市だからこそその青春映画、楽しいロケでした。ありがとう。

『青春デンデケデケデケ』が描く、 終わらない青春

作品のタイトルである「デンデケデケデケ」。ベンチャーのパイプラインのメロディーから来ています。一般的には「デケデケ・サウンド」と呼ばれていますが、「デケデケ」ではなく「デケデケ」としたところに、芦原さんのこだわりがありました。

「主人公の人生を変えるような衝撃を与える音、『電氣的啓示』を与える音の響きは、デケデケではなく、デケデケじゃないといけない」と芦原さんは語っており、大林監督も「この語感だからいい。手ごたえ、直感があつた」と話しています。

1960年代の高校生の青春物語ですが、「あのころは

良かった」という懐古談にとどまらない魅力があります。

物語の終盤、高校3年生になった主人公たちは、進学や就職に向かって歩き出します。もう高校生としてバンド活動はできないけれど、友人たちとはずっと音楽でつながっている、この先何が起きてても、大好きな音楽が自分を守ってくれるという希望を持って物語は終了します。

音楽や本、映画、友人など、誰の人生にもかけがえのない出会いや夢中になれるものがきつとある、過去が楽しかったなら、現在や未来はもっと楽しいはずということはこの小説は伝えてくれているように思います。

『青春デンデケデケデケ』

芦原すなお著・河出書房新社刊

●あらすじ

1960年代の観音寺市。高校進学を控えた春休み、主人公の「ちっくん」こと藤原竹良は、ラジオから流れてきたエレキギターの音に衝撃を受け、ロック音楽に夢中になる。入学後、仲間を誘ってバンドを組み、アルバイトで稼いでギターを手に入れる。高校最後の文化祭、コンサートを開くことに。恋愛や受験、進路などの悩みを抱えながら、成長する高校生たちの青春を描く。

●主な登場人物

- 藤原竹良 主人公。通称ちっくん。「ロッキング・ホースメン」の実質的リーダー。ボーカルとサイドギター担当
- 合田富士男 ベース担当。浄泉寺の息子で、あらゆる方面の知識が豊富
- 白井清一 リードギター担当。メンバーの精神的支柱で、鮮魚店の息子
- 岡下 巧 ドラムス担当。温厚で素直で優しい、練り物製造業の息子
- 谷口静夫 メンバーの同級生で機械に詳しい。名誉メンバーとして、バンドの技術顧問に就任



本・映画の中の、愛すべき観音寺の言葉

『青春デンデケデケデケ』の魅力は、終始用いられている方言です。

芦原さんは「滅びつつある観音寺の言葉をしっかりと活字に定着させておきたかった」と話しています。言葉はどんどん標準化され、若い人はあまり使わなくなった方言もあります。

大林監督が映画化する際にこだわった観音寺弁を、小説の中からいくつか紹介します。



あー、どうしょうに！

「あー、どうしょう！」の意味。
突然、クラスメイトに海に誘われた時のつぶやき。

ほんなら帰るきんな

「それじゃあ帰るからね」の意味。
最初で最後の海でのデートをして、家に帰る分かれ道で。

ええ名前じゃがな。どこばりにないで。

「いい名前だわ。そんじょそこらにないよ」の意味。「～ばり」は便利な方言の一つです。「どこばり」「誰ばり」「何ばり」など。

大林監督と観音寺弁

大林監督がこだわった観音寺の方言。監督は、若い俳優陣に「観音寺の女学生を観音寺弁でナンパできるくらいになりなさい！」とハッパをかけて、撮影開始1カ月前に観音寺市へ送り込みました。1カ月後、助監督から「大丈夫ですよ。観音寺の青年になりましたよ」と連絡があったそうです。映画では俳優たちが見事な方言を披露しています。

誰っちゃんに言わんといてくれよ

「誰にも言わないでくれよ」の意味。
15分以上悩んだ後に、ようやく恋していることを打ち明けた時の一言。

勉強もこじゃんとせえや。成績下がったらそのギター取んりゃげるぞな

「勉強もしっかりしなさいよ。成績が下がったらそのギターは取り上げますからね」の意味。
ギターが欲しいからアルバイトしたいと言った主人公に母が「しょんがないなあ」と言いながらも。

お前、さいやがらんと もっとまじめに考えや

「お前、ふざけないでもっとまじめに考えろよ」の意味。
4人でバンド名を決めようとするも、最初はなかなかまとまりませんでした。

七間橋から歩いたら 半時間やいわんかかろげや？

「七間橋から歩いたら30分以上はかかるんじゃないか？」の意味。
夏休み、自宅がある七間橋町（現在の観音寺町）から歩いて会いに来てくれる女子生徒を不思議に思っ。

じょんならんのどな

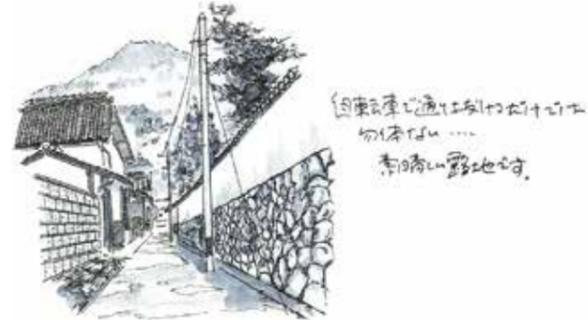
「どうしようもないんだからね」の意味。
バンドの合宿で訪れた場所で、近所の人に「あんたら不良じゃろがな」「わるさしに来たんとちゃうんな」と疑われ、言われた一言。



大切にしたい、懐かしい風景

今も残る映画のロケ地。当時作成された『青春デンデケデケデケ 観音寺ロケーションマップ』をもとに紹介します。

17 浄泉寺（羅漢寺）前の白壁の路地



美術監督
薩谷 和夫さん

これらのスケッチ画は、『青春デンデケデケデケ 観音寺ロケーションマップ』のために、映画の美術監督である薩谷さんが描いたものです。

薩谷さんは、大林監督の数々の映画の美術監督を務められましたが、『青春デンデケデケデケ』公開翌年の1993年1月に57歳で永眠されました。

18 合田富士男の家・浄泉寺（羅漢寺）



3 竹良の通学路（レンガ橋）



2 岡下巧と石川恵美子の出会い頭のキスシーン



4 ラストシーンの堤防



10 三架橋



7 竹良の通学路（タイコ橋）



12 赤い鳥居のある白藤稲荷の路地



9 琴弾八幡宮の石段



13 清一がトイレを借りたお寺（一心寺）





観音寺第一高校
ギター同好会



ギター同好会は、2年生5人、1年生13人の総勢18人。練習は、主に自宅や市内の貸スタジオで行っています。演奏を披露する場合は、秋の文化祭と3月の終業式の2回ですが、ことしは新型コロナウイルスの影響で、ともに公演が中止となりました。来年は演奏できますように。

～文化芸術活動をサポートします～
ハイスタッフホール練習応援プラン



大・小ホールを時間単位で利用できる、期間限定のプランを実施しています。この機会に、ハイスタッフホールの上質な音響やステージでのぜいたくな時間を体感してみませんか。詳しくは、問い合わせください。

- 利用料金

大ホール	平日	1時間	1,500円
	土・日、祝日	1時間	2,000円
小ホール	平日	1時間	1,000円
	土・日、祝日	1時間	1,200円

※ピアノ等の器具代は別途必要です。通常の半額で利用できます。

- 利用可能期間
12月27日(日)まで ※期間は短縮する場合があります。

スタジオは防音対応



ドラムセット、キーボード、ミキサー、ギターアンプ、ベースアンプも貸し出しています。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、人数制限を設けています。利用の際は問い合わせください。

問い合わせ先 ハイスタッフホール
☎23-3939 ②3-3966

映画にはエキストラで出演しましたが、衣装として60年代のスーツに合わせ、腕時計まで当時の物を渡されたんです。映らなくても、そこまでこだわる方でした。
音楽は生活の一部
今は5つくらいのバンドを掛け持ちしています。3日と空けずにギターに触れていますね。音楽には嫌なことが何もないんです。練習も楽しい



テレビの企画で大林監督と2人でロケ地を巡り対談したことも

し、舞台上で演奏するのも楽しい。楽しいことばかりなのでやめられません。



芦原さんや高校時代のバンドメンバーらと結成した「ロッキング・ホースメン」は、これまで250回以上公演。演奏した会場は、地元の上市商店街からシドニーまでと幅広い

高校生から、ずっとバンド人生。音楽は、もう僕の生活の一部になっています。



デンデケデケデケは鳴り止まない

『青春デンデケデケデケ』の登場人物である、白井清一のモデルになった原さんと、ちっくんたちの後輩になる観音寺第一高校ギター同好会の音楽が大好きな皆さんにお話を聞きました。

INTERVIEW

音楽は楽しもうじいじいばかりでやめられない

芦原すなおさんの同級生で、バンドの主軸となるギタリスト・白井のモデルになった原隆さん。高校時代は同級生と「TEAM AMS」というバンドを組み、活動していました。音楽との出会いや大林監督との思い出をお聞きしました。

中学3年生でギターを始めた

音楽のきっかけは、本と同じでまさにベンチャーズ。パイプラインのトレモログリッサンド奏法(デンデケデケデケ)を聞いてびっくりしました。高くて買えないので、最初のギターは自分で作りました。

高校入学後、同級生4人でバンドを組みました。安いエレキギターと小さいアンプを買って。ベンチャーズとはかけ離れていたけど、バンドをやれば、自分たちにもある程度の演奏ができるのが楽しかった。

当時、ギターを弾く人は世間では不良扱いをされていたんですが、田舎の高校だったし、大目に見てくれたのではないのでしょうか。僕らの後に、ギター同好会ができましたね。

観一文化祭でライブを決行

芦原さんは友人で、バンドの練習の時は必ず見にきていました。彼は生徒会の人たちと親しく、高校2年生の時、文化祭で僕たちのゲリラライブを段取りしてくれました。ライブは盛り上がりしました。「ここまでやるのか」って、皆びっくりしていましたね。

練習に明け暮れた高校生活

当時は、勉強そっちのけで練習していました。練習場所がないので、メンバーの家を回りながらやっていたが「うるさい！」と怒られ、衣料倉庫や大野原の友人に頼んで、田んぼの真ん中にある納屋を借りて練習していました。テントを持って荘内半島で合宿したこともあります。食べられないものがあると、海に潜



原 隆さん(観音寺町)

ってサザエを採ったりして、のどかな時代でした。

大林監督の細部へのこだわり

映画の撮影が始まり、芦原さんと何度か現場を見に行きましたが、監督がシナリオではなく、原作本を持って指導していたことに驚きました。また、僕の高校のライブの写真を見て、当時白いギターを使っていたのを知ると、撮影用のギターがすでに届いていたにもかかわらず、再発注していました。

上市商店街で営む店舗の地下に音楽スタジオを建設。学生が練習場所に困らないようにと一人1時間500円で貸し出しています

☎25-3674